

博士學位論文審査要旨

2010年1月19日

論文題目： 在日朝鮮基督教会の女性史研究

学位申請者： 呉 寿恵（おう すへ）

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 原 誠

副 査： 神学研究科 教授 森 孝一

副 査： 神学研究科 教授 水谷 誠

要 旨：

現在の在日大韓基督教会は、「在日朝鮮基督教会」として留学生を中心に創立され 100 年の歴史を刻んできた。この教会は韓国併合以前に東京にきていた留学生を中心にして始められ、幾多の困難のなかで歩んできた。この教会は、当然のことながら朝鮮の伝統的な家父長制と儒教精神のゆえに、教会の運営などさまざまな局面で男性優位の教会であった。

本論文はこの歴史のなかで抜け落ちてしまう女性、すなわち女性信徒、女性伝道者(バイブル・ウーマン)に焦点をあてて、日帝下における 1907 年から 45 年までの間の 37 年間の諸活動を、丹念な資料収集に努めて掘り起こした論文である。

最初に、朝鮮へのキリスト教の伝来と朝鮮の伝統、そのなかにおける女性の位置について述べた後、留学生と東京朝鮮基督教青年会(YMCA)と在日本東京朝鮮女子基督教青年会(YWCA)について述べ、本国の朝鮮イエス教長老会と朝鮮監理会から派遣されてきた牧師と日本におけるこの伝道を支援し続けたカナダ長老教会の宣教師によって創立された在日朝鮮基督教会の創立について述べる。

各々の時期について、教会の諸活動について説明しつつ、その時期に活動した女性信徒、女性伝道者(バイブル・ウーマン)の一人一人についてその信仰歴、神学校、教会の状況などについて紹介、分析した。女性伝道師は、家庭訪問、聖書研究会、指導などの活動に加え、男性教職(牧師)やカナダ長老教会の女性宣教師の助手として、表に現れない煩わしい仕事をおこなった。本国で従属的な位置にあった彼女らが、日本のなかで、多くの困難、障害がありながらも、主体的に活動できる場面が多くあったことも指摘される。

これらの女性伝道師たちは、本国の神学校の卒業生と日本の神学校に留学して卒業後、日本で働いたケースがあり、彼女たち 77 名の、出身神学校、教派、その活動の個々のケースを可能な限り調査するという貴重な作業を行った。

日本で生活する朝鮮人の生活地域が拡大、拡散するにつれて教会の活動とともに彼女たちの活動も拡大し、異民族の土地である日本で、故郷を離れ、友人も少ないなかで、同じ言語を語り、食卓を囲み、教会の諸活動を下から支えたのであった。神社参拝に抵抗し、創氏改名に応じなかったケースも紹介される。韓国とカナダの各神学校、教会で行われ、また日本の各神学校で行われた丹念な資料収集とインタビューは、文字通り、論者のいう「ハーストーリー(Herstory)」としての大きな意義がある。現在の在日大韓基督教会の歴史叙述にとっても不可欠な業績として指摘できる貴重な労作といえる。

よって、本論文は、博士(神学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2010年1月19日

論文題目： 在日朝鮮基督教会の女性史研究

学位申請者： 呉 寿恵（おう すへ）

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 原 誠

副 査： 神学研究科 教授 森 孝一

副 査： 神学研究科 教授 水谷 誠

要 旨：

上記審査委員は、2010年1月19日(火)、11時から約2時間にわたって上記学位申請者に対する試問審査を行なった。学位請求論文に対する質疑応答に関しては、申請者から適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的価値が確認された。また、申請者、本論文の背景および土台となる韓国キリスト教史、日本キリスト教史、またカナダ宣教師団に関わる英文資料の解読、加えて深い神学的知識を有することも認められた。語学試験(英語、ハングル)においても、十分な学力のあることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：在日朝鮮基督教会の女性史研究

氏 名：呉 寿恵（オー・スヘ）

要 旨：

在日大韓基督教会（Korean Christian Church in Japan 以下 KCCJ）は、2008 年に宣教 100 周年を迎えた。KCCJ のように、植民地支配下の宗主国において自民族の教会を設立し、存続しつづけたという例は、世界的にも稀である。

現在の KCCJ の前身である戦前の「在日朝鮮基督教会」は、1910 年の日本による韓国併合以前に、東京に来ていた留学生を中心に始まった。KCCJ は、差別・偏見・蔑視の中で苦しむ同胞の苦難を共に担いつつ歩んできた。しかし、100 年の歴史を有してきたとはいえ、その歴史を語るとき、どうしても抜け落ちているのが女性の存在である。教会設立のために貢献した女性たちがまったく見えない存在とされている。

本論文の目的は、日帝下における在日朝鮮基督教会の 37 年間（1908～1945）の女性の隠れた歴史の「掘り起こし」と、その女性たちの働きを明らかにすることである。家父長制と儒教精神の様々な制約の中で、女性は常に蔑視され無視される存在であった。在日朝鮮人であるが故の差別・偏見のほか、女性はさらに二重・三重の差別・偏見の中で生きなければならなかった。このような社会的・民族的制約の中で、女性たちは、強い信仰に裏打ちされた働きを為した。女性伝道師・女性信徒たちの働き人によって、貧困・底辺で喘ぎ、絶望するしかなかった在日朝鮮人、特に女性や子どもたちに希望が与えられた。それが今日の KCCJ の礎になっているといえる。

本論文は、KCCJ 歴史編纂委員会がまとめた 4 つの時代区分を用いて、4 つの章に区分けした。

第 1 章は、創設期（1908～1924 年）である。日本による韓国の併合（1910 年）の直前から、亡国の危機の漂う中で、日本の先進文明を学び、祖国に貢献する使命をもった朝鮮からの留学生が増加していった。この留学生を中心として、「在日本東京朝鮮耶蘇連合教会」（東京連合教会）が生まれた経緯と背景、そこに関わった女性たちを記述する。併合後の 3・1 独立運動の発火点ともなった「2・8 独立宣言」運動は、男女留学生が共に闘った民族抗日運動であった。民族的国難に対する強い思いをもった女性留学生キリスト者は、本国のキリスト者の働きと呼応し、日帝との闘いを実践して、女性運動の先駆的役割を果たしていった。本論文では、初期の在日朝鮮人キリスト者女性として、金瑪利亜・黄愛施徳・黄信徳の三人の働きをとりあげる。

この時期は、東京中心、エリートである留学生が中心であった。しかし他方、1910 年代後半からは関東だけでなく、九州地域、関西地域、中部地域などの日本の各地に

朝鮮人労働者、特に女性労働者（女工）が増加していき、各地に在住する在日朝鮮人への伝道が本国の長老会、監理会の長・監（チャンガン）公議会によって始まっていた。在日宣教師連盟の協力もあり、朝鮮人の多住地域に教会が設立されるようになり、宣教の働きがひろがっていった。

第2章は、成長期（1925～1933年）である。在日朝鮮人、特に女性の数が増加するにつれ、教会の女性数も増え、日本各地に教会がひろがっていくのに比例して、女性伝道師の必要性が増していった。1925年からは、本国の長・監公議会に代わって、「朝鮮イエス教連合公議会」が在日宣教へ参与した。さらに1927年からは、「カナダ長老教会」が在日宣教へ参与した。このカナダ長老教会の宣教参入は、在日朝鮮基督教会に大きな成長をもたらした。女性伝道師たちの働きは、女性と子どもに対する宣教活動が中心であった。教育的事業としての主日学校、社会的事業としての夜間学校、幼稚園（カナダ女性宣教師と共に）などの働きに携わった。これらの働きが、在日朝鮮人社会において果たした役割は大きいといえる。また女性伝道師は、後援会をつくって教会建築を助け、女伝道会（ヨジョンドへ）を組織して、女性伝道師の働きを支えることに寄与し、自立を目指した。この時期の女性伝道師は、本国からの10名と、日本の女子神学校出身者11名の、計21名である。この21名の女性伝道師と女性信徒（女伝道会）の働きを記述する。

第3章は、自立期（1934～1940年）である。在日朝鮮基督教会は、1934年に本国教会から制度的に独立し、「在日本朝鮮基督教会」となった。しかし1936年に日本基督教連盟に加入する際に加入条件を課せられ、在日本朝鮮基督教会は、その名称から「在日本」をはずし、「朝鮮基督教会」（朝基）と名称変更せざるを得なかった。日帝による「皇民化」政策の強化、神社参拝の強要の嵐の中で、朝鮮基督教会の女性たちは、黙々と信仰生活を行うが、それに抵抗した女性も存在した。朝鮮人人口が増加の一途をたどる中で、女性の人口に占める割合はますます増えていった。また、貧しさゆえに医療を受けられない朝鮮人のための医療ユニットの計画が立てられ、看護師が確保されている。

この時期は、最も女性伝道師が多かった時期である。女性伝道師の増加から、41の女伝道会が形成され、朝鮮基督教会の発展に繋がった。女性伝道師の数は、本国からの30名、日本の女子神学校出身者の9名、それに前期から継続して活動していた7名の計46名に及ぶ。この時期の女性信徒（女伝道会）の働きと、39名の女性伝道師について記述する。

第4章は、受難期（1940～1945年）である。戦時下、朝鮮基督教会は受難の時期に入っていた。「宗教団体法」のもと、朝鮮基督教会が、一教団としては存続できないと判断し、苦しい模索の中で選択した生き残りの方法は、日本基督教会と合同することであった。しかし、日本基督教会からの条件をすべて呑むことで、朝鮮基督教会は日本基督教会へ「併合」された。女伝道会もその組織を解散せざるを得なかった。さらに、全プロテスタント教会が日本基督教団へと合同していく中で、旧朝基の諸教

会も日本基督教会の一部として、日本基督教団へ統合された。この時期、旧朝基の教職者・信徒は、創氏改名を余儀なくされ、また、日本語使用が強要される中で、大きな苦難を強いられた。その苦難の中で、旧朝基が戦争協力をしたという事実がある。これは、旧朝基の戦争責任の問題であり、KCCJにおける今日的課題でもある。この時期の女性伝道師は17名と、前期からの継続者7名の計24名である。この時期の女性信徒（女伝道会）の働きと17名の女性伝道師について記述する。

第2章から第4章を通じて、女伝道師（ヨジョンドサ）と呼ばれた女性伝道師（バイブル・ウーマン）は、1925年から1945年までの20年間に77名が存在していたことを確認した。女性伝道師は、家庭訪問、女性のための聖書研究会、女伝道会の指導、カウンセリングなど、「女性に対する」働きを行った。また当時の在日朝鮮人社会は、本国と同じく儒教的制約が強かったため、男性教職者が女性に伝道することは困難な状況であった。そのため女性伝道師が、男性教職者を助けた。女性伝道師は、トラクト配布、祈祷会、主日学校、幼稚園、夜間学校などの働きの中における、表面には現れない細かく煩わしい仕事に耐える隠れた存在であった。しかし、男性教職者の絶対数が不足している中での女性伝道師の働きに対する期待は大きく、彼女たちにとってもやりがいのある働きだったのではないだろうか。欧米からの女性宣教師の働きにも共通することであるが、本国ではいつも従属的立場にあった女性が、日本へ来て主体的に活躍できることが多くあった。男性教職者がいくつもの教会を兼任・兼牧していたため、必然的に女性伝道師が礼拝を導く役割を担うことになったためである。

在日朝鮮基督教会の性格の特徴としては、「合同性」、「マイノリティ性」、「民族性」の三つを上げることができる。女性伝道師の出身教派は長老会および監理会であったが、このことも在日朝鮮人教会のエキュメニカル性を表す一例である。教会は、故郷を離れ友人も少ない中で、同じ言語で語り、食卓を囲み、情報交換ができる「民族・信仰共同体」であった。異境の地で差別・偏見を受け、マージナルな位置に置かれていた在日朝鮮人に対して教会は、民族教会として存在することによって希望の源である福音を語ったのである。女性伝道師は、このような特徴のある在日朝鮮基督教会の形成に参加し、豊かな果実を生み出す働き手となった。日帝の同化政策の中で、神社参拝に果敢に抵抗し、創氏改名に毅然として応じなかった女性たちもいた。これらの働きがあったからこそ、KCCJが宣教60周年（1968年）に大きな宣教の転換点を迎え、1980年代には女性の教職・長老を認めえたのである。

在日コリアンは、日本と本国の「狭間」で常に両方からのさまざまな影響を受けざるを得ない位置に立たされてきた。このことは現在でも同様である。過去に生きた女性伝道師をはじめ、多くの女性たちの生き様をみることを通して、今日の私たちが生きていくべき道に対して多くの示唆が与えられている。過去の女性の働きに光があてられ、今まで隠されていたことが明らかになることによって、KCCJの未来が見えてくるのである。